《六郷文王妖術》　足を焚くこと

六郷文王、きょうもきょうとて、ぶらり、ぶらりの一日だが、

「十月小春、ヒザ株出はる隣のお春、呼ばれば出はる」などと他愛もないことを口ずさみながら羽州街道の並木道を六郷へ向けて歩いている。

色あせた十徳なんぞを着こんで、医師だか、連歌師だかを気どっているけれども、その貧相は覆い隠すことができない。

文王が口ずさんだように、この日は十月小春日和で、春先のような一日だったが、さすが陰暦十月、短い日脚が西の山にストンと落ちるように暮れると、ブルブルッと身ぶるいがして、文王、クシェンと一つくしゃみがでた。

「おお寒い、どこぞに火がないか」

と、さがしながらさしかかった貝の窪あたり、見回せば、とある一軒家に今しも灯がともった様子。文王、声高に案内を乞うと、ボソボソ答える声が聞きとれない。

文王、ガラリと引き戸を開けてズカズカ家の中。

そこには一人の老爺がいて、夕食のしたくにとりかかろうというところで、土鍋には磨いた米があり、かたわらの土瓶はどぶろくと見えた。

文王、

「オレは酒も飯もいらぬが熱い火にあててくれ」と言うに、老爺は心の中で、

「無礼な男だ」

と思ったが、

「人にあてる火はない」

と剣もホロロの返答である。

文王、怒ると思いきや、

「それはしかたがない、それじゃ自分で勝手に…」

と、ナタを借りて、自分のスネを削りはじめた。

老爺は腰を抜かさんばかりに目をカッと見開いているばかり、文王の削られた足が木片に化し、イロリにくべられてパチパチ燃える。小半刻もたたぬうち火は燃え尽き、オキさえも灰色となる。

文王、

「いや、十分ぬくまった。さらば…」

と去って行く。

しばらく茫然自失の老爺、夢から覚めたようにイロリを眺めた。

「アーッ」

老爺は仰天した。イロリの炉ぶちは無残に削りとられ、もはや火の色もなくなった炉石だけが、さむざむと残っていた。